

以上、全八十句を便宜上、八句ずつ十段落に分けて概略を述べてきた。ここで改めて各段落とのつながりを考察してみる。すると、前述の井上氏の「誄」の言及に、この道真の詩を充てて考察すれば、この作品の構成が上手く説明できることが明らかになる。

つまり、



↓ 藤原滋実の陸奥の国守としての功績・徳行



↓ 藤原滋実が人々の呪詛により命を落としたその死を悲しむ

「前半」で藤原滋実の生前の徳を誉め、「後半」でその死を悲しむという、井上氏の言及する「称える事と哀悼する事が両立する記述」になっていることが明らかになるのである。

さらに、ここで、考えなければならない事はなぜ、道真が、この詩を古代中国で制作されてきた「誄」の文体